

平成21年 4月10日現在

研究種目：若手スタートアップ  
研究期間：2007～2008  
課題番号：19820031  
研究課題名（和文） 四川漢代石闕にみる儒教系図像の地域的受容と展開  
研究課題名（英文） Capacity of Confucian Iconography  
on Stone Gate Towers of the Han Dynasty in Sichuan  
研究代表者  
榎山 満照（NARAYAMA, Mitsuteru）  
早稲田大学・文学学術院・助手  
研究者番号：30453997

## 研究成果の概要：

『後漢書』、『歴代名画記』等の記述によると、儒教的な歴史故事を画題とすることの意義は、観る者に対して勸戒的作用が及ぶことであった。しかし、本研究では四川地域の漢代石闕に見出される特異な重層的図像表現、すなわち「羽翼の生えた儒教の聖賢」に着目した。その結果、それはらずで単なる儒教的範疇を脱していたことが想定され、「仙境へと連なるイメージ」をも付加された、儒教的かつ神仙的なダブルイメージをもつ特異な図像として当地で受容されていたことを明らかにした。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,320,000	0	1,320,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,220,000	270,000	2,490,000

研究分野：中国古代美術史

科研費の分科・細目：2806

キーワード：四川、石闕、儒教、漢代

## 1. 研究開始当初の背景

考古学的発掘と文献史料の記載により、後漢時代の支配者層が造営した墓域は、地下の墓室と地上の祠堂・門闕からなる複合施設であったことが明らかにされている。しかし従来、漢代美術の調査研究は、墓室内部を飾っていた画像石を主な考察対象として図像学的な主題解釈が進められてきた。それに対し、今なお地上に現存する石闕については、形態による概括的な分類研究に留まっており、地上に残る石闕の図像と地下の画像石との相関関係・役割の分担等については、十分には検討されていない。また、なぜ後漢時代の四川地域において石闕が多く造営されたのか、という極めて根本的な問題についても、十分に議論されていないのが実情であった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、中国の西南部、四川地域に今なお現存する漢代の石刻美術作品、「石闕」を調査研究対象とし、実作品と文献史料の双方による造営背景の検討、ならびに造営者による主題の選択意図の解明を目指すものである。

(2) 墓域の入口に造営された石闕は、死者の世界および地上の現実世界へと続く二面性をもつ装置である。それ故、そこにあらわされた神仙や儒教系歴史故事は、死者の魂の安寧や亡き一族の儒教的高徳を顕彰するためだけのものではなく、地上の現実世界の住民へ向けても、何らかの意味を発するものとしてあらわされた可能性があろう。本研究においては、まず現地調査による詳細な図像的分類をおこない、つづけて史書の記載をもとに、当地の墓葬美術において儒教系図像が担っていた役割を明らかにする。

(3) 今日、我々が目にする漢代の美術作品のほぼ全ては、地下からの出土作例である。それらは、端的に言うならば「死者の靈魂の行方」を追ったものであるため、ともすれば「死者のための美術」という単一的イメージで捉えられてきた。しかし、当時の思想界を席卷していた主流思想は、現世での【忠孝の実践】を奨励した「儒教」であり、盛んに絵画化された儒教の聖人たちの図像は、人々を教化する役割を果たしていたのである。こと四川石闕の図像に関しては、神仙思想体系による主題解釈に留まるべきではない。神仙思想と儒教の合理的世界観が渾然一体となった特異な死生観によって、地上の石闕にあらわされた儒教系図像の実相を解明することにより、現実世界の住民に向けて発せられた意味や、造営者たちの真の意図を理解することができよう。そうした考察を経て、はじめて漢代の思想界を席卷した儒教と墓葬美術との

関係を、より体系的に捉えることが可能となるのである。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、約 1800 年もの間風雨にさらされながらも、今なお地上に現存する石闕の実作品を調査対象とするものである。そのため、現地でのフィールドワークを実施し、図像の詳細な記録作業を行うことが大前提となる。

(2) この調査での主たる目的は、図像の詳細な記録を残すことである。具体的な方法としては、図像配置図と描き起こし図を用いた記録のほか、高解像度デジタルカメラの撮影によるデジタルデータ保存を用いた。その理由としては、やはり、石闕自体の損壊や図像の摩滅が進行しつつある現状に関係する。

(3) 高画質デジタルデータそのものは劣化の恐れがなく、今現在の石闕作品の現状を後世に伝えることができる。また、三次元処理ソフトを用いて、ディスプレイ上に石闕を復元表示することも可能であり、それを展開図として表示することにより、図像内容全体を把握することも容易となるのである。こうした処理技術は、近年、美術史的図像研究にも応用され始めており、その有用性を実証する直近の例としては、中国における龍門石窟摩崖造像の調査が挙げられよう。こうした記録データの処理や保存利用が可能となるのは、デジタルデータが比較的容易に加工できるためであり、本研究における記録作業に、高解像度・高画質デジタルカメラの撮影を用いた最たる理由もここにある。

## 4. 研究成果

(1) 中国国内に現存する石闕の総数 32 点のうち、四川地域には 23 点もの作例が集中して確認されている。山東省や河南省にもわずかながら石闕の現存作例があるが、四川石闕を特徴づける点は、他地域の作例には認められない浮彫りの画題の豊富さと、その絵画性にある。とりわけ「周公輔成王」「季札挂劍」「董永侍父」「荊軻刺秦王」など、忠孝の実践に代表される儒教的徳目を内包する画題の存在は留意される。

(2) 四川地域の石闕には、西王母やその眷属などの「仙境へと連なるイメージをもつ図像」と、周公や季札などの「歴史故事を題材とした儒教図像」、この二種の図像が認められる。儒教的な歴史故事を画題とすることの意義については、唐代の張彦遠『歴代名画記』巻一冒頭で言及されているように、それを鑑とすることにより、

観る者に対して勸戒的作用が及ぶことを期待したものである。四川地域において石闕が盛んに造営された後漢時代後期においても、そのような儒教的勸戒主義に基づく役割は同様であった。殊に過去の聖人や賢人が登場する歴史故事ほど、観る者にとって戒めとなる画題はない。それは石刻画像においても同様であり、ここに儒教図像のひとつの機能を見出すことは易いであろう。墓域の入口にある石闕は、誰もが容易に目にすることが可能である。そこで入口に膾炙していた歴史故事の図像を見上げ、忠孝や仁義を貫いた先人の物語を想い、それを処世訓として自らの行動規範としていたことが想定されよう。

(3) もっとも、異なる思想背景をもつ両者の図像をともにあらわす例は、ひとり四川漢代石闕に限って認められるものではないが、ここで注目されるのは、四川地域の石闕に見出される特異な重層的図像表現、すなわち「羽翼の生えた儒教の聖賢」である。漢代におけるこのような羽翼の表現は、神仙を描く際に用いられた定型表現である。これは、人界を離れ仙境へと到る資格を示す、一つの標幟に他ならない。同時代の諸作例にみる図像表現を参照するならば、高頤闕を代表とする四川石闕にみる羽翼の生えた聖賢は、すでに単なる儒教的範疇を脱していることが想定され、「仙境へと連なるイメージ」をも付加された、儒教的かつ神仙的なダブルイメージをもつ特異な図像として捉え直していく必要がある。史書の記述に鑑みれば、儒教的な題材を図像としてあらわすことは、本来は現世に向けた勸戒的作用を期待したものである。そして実際に、その役割を果たしてきたに違いないが、四川地域の石闕においては、本来の勸戒的機能や性格と同時に、あるいはそれ以上に、仙境へと連なるイメージをも付加されたうえで図像化されていると考えられるのである。

(4) また、本研究では、現地調査による図像の詳細な記録作業を完成させるとともに、高解像度デジタルカメラによるデジタルデータ保存を試みた。平成 19 年度に成都市、雅安市を中心とした成都平原に現存する石闕の調査を実施し、翌平成 20 年度には、四川省渠県、重慶市等の四川地域東部にて実見調査を実施した。それにより、ディスプレイ上で図像を復元・展開表示し、図像内容全体を容易に把握することが可能となった。

(5) 図像の風化、摩滅が進む四川地域の石闕に関しては、現状での詳細な記録作業を完成することが関連分野の研究者の間でも求められている。現在、本研究で得られた画像データをもとに、記録調書のほか、鮮明な画像データを収録

したデータベースの作成を進めており、その成果本研究期間終了後に計画している他地域の石闕作品との総合的比較研究につながるものと考えられる。またこの成果は、1992 年に中国で刊行された四川石闕についての唯一の専論『四川漢代石闕』を補訂し得るものと考えられる。『四川漢代石闕』は、写真と拓本を用いて四川地域に現存する作例を網羅的に広く紹介した「内容総録」として学術的価値の高いものである。しかし、掲載写真が 1940 年代の不鮮明なものであるため、図像内容の正確な把握は困難であり、主題比定や銘文の釈読に、補訂を要する箇所が少なくないのである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

榎山満照「Representations of Immortals and Sages on Stone Gate Towers of the Han Dynasty in Sichuan: Their Functions and the Intentions of Their Erectors」、『TRANSACTIONS OF THE INTERNATIONAL CONFERENCE OF EASTERN STUDIES』No.53, pp.107-108、2009 年、査読なし

榎山満照「四川省雅安市高頤闕にみる漢代儒教図像の地域的展開」、『鹿島美術研究年報』第 25 号別冊, pp.271-281、2008 年、査読なし

榎山満照「東漢代墓葬美術中關於堯舜帝位禪讓伝説的図像表現」、『中國史研究』第 51 輯別冊, pp.155-169、2007 年、査読あり

榎山満照「後漢時代四川地域における「聖人」図像の表現 三段式神仙鏡の図像解釈をめぐって」、『美術史』第 163 冊, pp.193-207、2007 年、査読あり

[学会発表](計 3 件)

榎山満照「四川漢代石闕にみる神仙図と聖賢図 その機能と造営者の意図」、『第 53 回国際東方学会会議、2008 年 5 月 16 日、於日本教育会館

榎山満照「後漢時代の羽翼表現と聖人図像」、『日本中国考古学会 2007 年大会、ポスター発表、2007 年 12 月 1 日、於成城大学

榎山満照「東漢代墓葬美術中關於堯舜帝位禪讓伝説の圖像表達」、中國史學會第 8 回國際學術大會、2007 年 9 月 8 日、於韓国・国立慶北大学校

## 6 . 研究組織

### (1) 研究代表者

榎山 満照 (NARAYAMA MITSUTERU)

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：30453997